

日本英文学会関西支部 第15回大会資料

プログラム

研究発表・シンポジウム要旨

日時：2020年12月20日（日）11：00より

会場：近畿大学（〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3-4-1）

日本英文学会関西支部事務局

〒651-2187 兵庫県神戸市西区学園東町9-1

神戸市外国語大学外国語学部英米学科

E-mail: kansai2@elsj.org

※お知らせ

今年度は Zoom を用いたオンライン開催となります。大会本部のみを会場に設置し、研究発表およびシンポジウムはオンラインにて行う予定です。詳細につきましては、後日ホームページ上でお知らせします。

日本英文学会関西支部第 15 回大会プログラム

日時：2020 年 12 月 20 日（土）11：00 より

会場（大会本部）：近畿大学（〒577-8502 大阪府東大阪市小若江 3-4-1）

開会式 11：00 より

挨拶 日本英文学会関西支部支部長 新野 緑

研究発表 第 1 発表 11：10～11：50 第 2 発表 12：00～12：40
第 3 発表 13：30～14：10 第 4 発表 14：20～15：00

第 1 室 司会 京都教育大学准教授 奥村 真紀

1. *The Pirate* —ブランウェル・ブロンテと海賊

鈴鹿工業高等専門学校講師 古野 百合

司会 同志社大学教授 山本 妙

2. 「個」を描ききる——『ミドルマーチ』と『灯台へ』における女性達の流動する自己

神戸女学院大学非常勤講師 佐藤 エリ

司会 同志社大学教授 勝山 貴之

3. 『黒の仮面劇』におけるブリテン島統一のイメージ

関西学院大学大学院生 西田 侑記

司会 京都大学名誉教授 水野 眞理

4. 【招待発表】近代初期における寡婦の終活

奈良女子大学教授 齊藤 美和

第2室

司会 神戸大学准教授 奥村 沙矢香

1. *The Waves* のデザイン——Percival を中心に

武庫川女子大学大学院生 中谷 紘子

2. 自分だけの価値——Sophie Kinsella 著 *Twenties Girl* における女性達への本質的贈り物

奈良学園高等学校教諭 梅岡 千恵

司会 京都女子大学教授 鴨川 啓信

3. 【招待発表】 Jim Crace 作 *Harvest* が示す人間と自然の互酬関係の虚像性

関西学院大学教授 宮原 一成

4. (発表なし)

第3室

司会 京都大学特定講師 吉田 亜矢

1. 反逆の詩人パウンドの詩学

奈良女子大学大学院生 橘 真紀

司会 大阪大学教授 里内 克巳

2. J. D. Salinger の作品における Jack Kerouac 的カウンター・カルチャー表象

神戸大学大学院生 尾田 知子

司会 神戸大学教授 山本 秀行

3. 「蜃気楼」にある楽園——Kurt Vonnegut の *Cat's Cradle* における「虚構」の射程

三重大学特任講師 三宅 一平

司会 関西学院大学教授 橋本 安央

4. 【招待発表】 ゆきてかえりし物語——メルヴィルの創作原理を探る——

神戸大学教授 西谷 拓哉

第4室

司会 大阪教育大学教授 寺田 寛

1. (発表なし)

2. 名詞修飾構文「ノ」の獲得

九州国際大学准教授 木戸 康人

3. 探査子・目標一致の排除に向かって——問い返し wh 疑問文の派生——

関西外国語大学助教 大 宗 純

4. 【招待発表】文末に生起する副詞的 to 不定詞の解釈について

近畿大学教授 吉 田 幸 治

シンポジウム 15:20~17:40

英米文学部門

パンデミックの時代——共同体、統治、終末のヴィジョン

司会・講師

関西学院大学教授

西 山 けい子

講師

筑波大学教授

佐 野 隆 弥

講師

龍谷大学教授

福 本 宰 之

講師

関西学院大学教授

高 村 峰 生

英語学部門

言語変化の要因と過程——形態・統語・意味の観点から

司会・講師

関西学院大学准教授

茨 木 正志郎

講師

名城大学准教授

久 米 祐 介

講師

中京大学准教授

松 元 洋 介

講師

弘前大学講師

近 藤 亮 一

総 会 17:40 より

閉会式 18:00 より

挨拶

日本英文学会関西支部副支部長

水 野 眞 理

研究発表要旨

第1室

司会 京都教育大学准教授 奥村真紀

第1発表 (11:10 より)

The Pirate ——ブランウェル・ブロンテと海賊

鈴鹿工業高等専門学校講師 古野百合

ブロンテ初期作品研究の第一人者である Christine Alexander は、ブランウェル・ブロンテ(Branwell Brontë, 1817-1848)が15歳の時に書いた *The Pirate* (1833)のテキストを編纂し、詳細な解説付きで広く一般の読者にも読みやすい形式で2018年に出版した。姉のシャーロット・ブロンテ(Charlotte Brontë, 1816-1855)と共に書き綴った初期作品群 *Glasstown and Angrian saga* において、架空の国名に用いた Angria という言葉は、18世紀に存在したインドの海賊の名前でもある。2003年に出版された *The Oxford Companion to the Brontës* において、Angria は pirate kingdom の建国者である Kanhoji Angre(1669-1729)に由来すると記載された。しかし近年の研究では、Angre は実はデカン地方に存在したマラーター王国の海軍提督であったと修正する説が登場した。生誕200年祭を機に、イギリス側からみた植民地主義的な解釈とインド側からみた新しい解釈の双方を鑑み、より広い範疇から捉え直す必要に迫られていると言えよう。本発表ではブランウェルが主人公 Alexander Rougue に「商人、海軍提督、海賊」という三つの顔を与えた点に着目し、海賊と海軍提督という一見正反対の二つの肩書は実はコインの表裏をなしており、そこには若干15歳のブランウェルによる英国植民地主義への風刺が込められているのではないか、という点を考察したい。

司会 同志社大学教授 山本 妙

第2発表 (12:00 より)

「個」を描ききる

——『ミドルマーチ』と『灯台へ』における女性達の流動する自己

神戸女学院大学非常勤講師 佐藤 エリ

ジョージ・エリオットとヴァージニア・ウルフは、それぞれ『ミドルマーチ』(1871-2)と『灯台へ』(1927)において結婚生活を主要なテーマの一つとして、女性達の人生の多様性とその複雑な内面世界を描き出している。その一方で、各作品のヒロイン達であるドロシアとラムジー夫人は、個性を持った存在でありながらも、社会が考える「女性らしさ」の理想から免れえない。このような、女性を描くことにおけるジレンマを抱えつつ、両作家は共に個人を取り巻く環境や他者との相互作用によって流動的に変化する、彼女達の「自己」のありようについて追求する。

本発表では、他者との相互作用—「共感」—に焦点に当て、外部の規定する女性らしさの概念との関わりから、ドロシアとラムジー夫人の流動・変化する自己がどのように描かれているかを検証する。それにより、時代を超えて両作家が捉えようとした、個々の女性がもつ自己の重層性を明らかにする。

第3発表 (13:30 より)

『黒の仮面劇』におけるブリテン島統一のイメージ

関西学院大学大学院生 西田侑記

ベン・ジョンソンの『黒の仮面劇』は、ジェームズ一世のブリテン島統一計画にかかわるテキストとして漠然と認知されながらも、同作品における黒のイメージが当時の政治的文脈のなかでどのように理解できるのかという問題に対して、いまだ十分な議論は行われていないように思われる。また、1605年1月にアン王妃主催のもと、彼女を含む宮廷の女性たちに黒い化粧を施し、ヨーロッパ諸国から招待した大使たちの前で国王の政治的理想を賛美するというこの仮面劇の特殊な上演状況や、アンのサークルと国家統一計画との関係は非常に重要であるにもかかわらず、これらの要素はこれまで往々にして見落とされてきた。本発表の目的は、上述の上演事情を考慮に入れながら、『黒の仮面劇』における黒のイメージがブリテン島統一を祝福するうえでどのように活用されているのかを分析し、同作品が内包する政治的言説を明らかにすることである。

司会 京都大学名誉教授 水野眞理

第4発表 (14:20 より)

【招待発表】

近代初期における寡婦の終活

奈良女子大学教授 齊藤美和

人はどのように死に備えるべきか—近代初期に英国で出版されたいわゆる作法書 (conduct books) は、日々の生活がすなわち「終活」に他ならないことを繰り返し示唆し、また当時の伝記作家たちは人の一生を語るにあたり、その最期を記録に値する重要な局面とみなし、ときに生涯の他のどの時期よりも熱心にその仔細を綴ってきた。

女性の場合、妊娠・出産と家族との死別は、人生のなかでもとりわけ強く死を意識させる出来事であったと考えられる。出産により命を落とすことを覚悟しつつ、妊婦たちは子孫に宛てた遺言を粛々と準備し、夫に先立たれた妻は、夫の死を悼む日々の営みを通じて来るべき自身の死に備えた。

発表では特に寡婦の余生に焦点を合わせ、当時模範的とされた女の終活のあり方について確認するとともに、彼女たちが日常生活のなかで実際にどのように死に備えたのか、個別のケースを取り上げて考察することにしたい。

第1発表 (11:10 より)

The Waves のデザイン——Percival を中心に

武庫川女子大学大学院生 中谷 紘子

Virginia Woolf の作品には死や不在といったモチーフが用いられる傾向があり、*The Waves* (1931)も例外ではない。*The Waves* の主要部分は6人の幼馴染の独白で構成されているが、6人以外に Percival なる人物が独白しない者(=「不在」)として存在する。「不在」をモチーフとする他の作品と異なり、Percival はテキスト内において始終「不在」であるが、中心的存在として6人に影響を与えており、Percival には物語空間の構造化がモチーフとして表象されていると考えられる。そこで本論では、「不在」の Percival に注目し、この小説の物語空間における構造と意味について考えてみたい。その際、各章冒頭におかれた風景描写の表象との関連において作品を分析するのが狙いである。

第2発表 (12:00 より)

自分だけの価値

——Sophie Kinsella 著 *Twenties Girl* における女性達への本質的贈り物

奈良学園高等学校教諭 梅岡 千恵

20世紀の英国女流作家 Virginia Woolf は1929年、著書『自分だけの部屋』の中で、「お金と自分自身の部屋」という「外側にある条件」によって自己の人生を創造していく自由を得た事を書いた。未来を築いていく女性達にも、「外側にある条件」を整え、女性の存在価値を獲得するよう鼓舞した。

それから80年、「外側」にある社会的地位、物質的豊かさ、結婚を獲得するために奮闘してきた女性達だが、いまだ自分の真の価値を見出せずにいる場合がある。21世紀英国女流作家 Sophie Kinsella が2009年に発表した *Twenties Girl* では、主人公 Lara は元恋人に執着し、自分の存在意義を元恋人に委ねている。Woolf にとり伯母の死が一つの転機となったように、Lara にとっても大叔母 Sadie の死が一つの転機となる。

発表では、亡霊 Sadie との出会いを通じ、Lara が真の自由を手にし、自分の人生を創造していく成長過程を辿っていく中で、*Twenties Girl* が現代女性達に与える本質的贈り物を考えたい。

第3発表 (13:30 より)

【招待発表】 Jim Crace 作 *Harvest* が示す人間と自然の互酬関係の虚像性

関西学院大学教授 宮原 一成

Jim Crace が 2013 年に発表した長編小説 *Harvest* は、英国の第一次囲い込み時代を舞台とし、大規模な牧羊業導入計画を強引に持ち込まれた寒村が崩壊していく様子を描いている。Crace 自身が明かしたところによれば、本小説執筆の動機のひとつは、ブラジル西部で大事業家が大豆産業のため先住民に土地の明け渡しを迫っているという報道から感じた義憤だそうだ。そういう背景もあって、いきおい読者としては、従来この村の小作農たちが細々と営む自給的耕種農業のほうこそが、人間と自然の共生のあるべき互酬関係だとして描かれている、と読みたくなる。だがじつはこの小説は他方で、彼らのつましい営みに、自然に対する虐待や強要行為というイメージをまとわせることもしている。本発表では、人間からの働きかけに対し自然は応分に返報する主体的意思を示してくれる、といった等価交換や互酬性の期待に、本小説が待ったをかけていることの意義について考えてみたい。

第4発表 (14:20 より)

(発表なし)

第3室

第1発表 (11:10 より)

反逆の詩人パウンドの詩学

奈良女子大学大学院生 橘 真紀

本発表では、反逆者としての詩人 Ezra Pound に焦点を当てる。西洋の停滞した芸術、その眠れる精神を覚醒させるため、Pound は彼が称賛した中世プロヴァンスの詩人 Bertran de Born のように、怠惰や臆病や有力者への軽蔑をもって、虚飾の潜む古い因習に火をつけ、新たな芸術を作ろうとした。彼は 1914 年には、雑誌 *Blast* において、自身のことを、流動的な力を持つ創造的な芸術家であると述べ、渦巻と自身を重ね合わせている。渦巻とは、外のもを内に吸収しつつ、自らも大きなエネルギーを発するものである。

Pound の自由を奪うものへの反感は、やがて、彼の固定した一つの世界観への収束を避けようとする姿勢、ひいては、詩の中で、異質なものや対極のものを同じ舞台に並置する技法に繋がっていく。従って、本発表では、彼の初期の詩における、平穏と狂騒、眠りと目覚め、西洋と非西洋などの対立するイメージを追うことで、その反逆精神と渦巻主義との係わりを検討していきたい。

第2発表 (12:00 より)

J. D. Salinger の作品における Jack Kerouac 的カウンター・カルチャー表象

神戸大学大学院生 尾田知子

J. D. Salinger (1919-2010) の作品とカウンター・カルチャーとの関連性は、先行研究において言及のみにとどまり、ビート・ジェネレーションの文学と実際に照らし合わせて検討した研究は存在しない。しかし、Salinger の作品の美点とされる複数の宗教・文化の並列・共存の図式は、同様にアメリカ社会の「周縁」から文学テキストを紡いでいた Jack Kerouac (1922-69) の小説においても顕著である。したがって、Kerouac の作品との共通点を指摘することで、Salinger のカウンター・カルチャー的側面を焙り出せる可能性は十分にある。

本発表では、小説 *Tristessa* (1960) を中心とした Kerouac の作品と、中編“Seymour: An Introduction”を中心とした Salinger の文学の共通点を、東洋やネイティブ・アメリカン等、WASP (White Anglo-Saxon Protestant) に対して「オリエンタル」と見なされるものへの自己投影が、第二次大戦後の体制順応主義に対抗するオルタナティブな価値観の希求へと結びついているさまに見出す。Kerouac の「オリエンタル」表象との類似性を指摘することで、Salinger の作品をカウンター・カルチャーの観点から研究する意義を主張したい。

司会 神戸大学教授 山本秀行

第3発表 (13:30 より)

「蜃気楼」にある楽園

——Kurt Vonnegut の *Cat's Cradle* における「虚構」の射程

三重大学特任講師 三宅一平

本発表で扱うカート・ヴォネガットの『猫のゆりかご』(1963)は、鍵となる二つの要素、すなわち、ヴォネガットによる架空宗教「ボコノン教」と、架空物質「アイス・ナイン」をもって展開する。「無害な非真実」の信仰を説くボコノン教と、形而上学的な「理論」であり、実用不可能なものとして構想されながら、実現することとなったアイス・ナインの両者からは、「虚構」と「現実」の連関、相互作用を読み取ることが可能である。

また、この2つの要素が収斂するのが、「楽園」を喧伝するサン・ロレンゾという島国であり、同時に小説の結末においてアイス・ナインによるアポカリプスを引き起こす発端となった場である。本発表では、ボコノン教、アイス・ナインに見られるメタフィクション性の観点から、語り手の目に「ファタモルガーナ」として映ったサン・ロレンゾの表象を、幻視される「楽園」とその限界を提示するものとして分析したい。

第4発表 (14:20 より)

【招待発表】

ゆきてかえりし物語

——メルヴィルの創作原理を探る——

神戸大学教授 西谷 拓哉

メルヴィルに“diptych”と称される短篇が三つある。英米を舞台とした二つの短篇を組み合わせた形式の作品で、二つ折り、二幅対の絵になぞらえて研究者間でそのように呼ばれてきた。メルヴィルのディプティックは従来、対応物、対照、合わせ鏡、並置といった観点から論じられてきたが、ここでは作中の言葉を用いて「反転した同質性」(inverted similitude)と捉えることにする。本発表の趣旨は、この inverted similitude をメルヴィルの一貫した創作原理と見なしたいということである。この発想の原点は『レッドバーン』(1849)にある。この小説はリバプールに行ってニューヨークに戻ってくる旅というものを、文字通り「折り返される」作品構造として形象化しており、作品の前半と後半はまさに inverted similitude となっている。この手法が後のディプティックにおいて別の形で転生したのである。さらに言えば、原典(種本)を別の形に書き換えるというメルヴィル特有の書法とも通じていると考えられる。

第4室

第1発表 (11:10 より)

(発表なし)

司会 大阪教育大学教授 寺田 寛

第2発表 (12:00 より)

名詞修飾構文「ノ」の獲得

九州国際大学准教授 木戸 康人

本発表は日本語を母語とする幼児が名詞修飾構文を獲得する際に観察される unnecessary 「ノ」が何なのかを明らかにすることを目的としている。具体的には、2歳から4歳頃の幼児が発話する「赤いノぶーぶー(赤い車)」における unnecessary 「ノ」を分析対象とする。これまでに、この unnecessary 「ノ」に関して、代名詞仮説(永野 1960)、属格仮説(Clancy 1985 等)、補文標識仮説(Murasugi 1991)が提案されてきた。しかし、本発表ではそれらの仮説はどれも発話データを包括的に説明できていないと指摘する。その代わりに、包括的に説明可能な新たな仮説を提案する。そして、その提案を裏付けるためのデータを CHILDES を使用して示す。

第3発表 (13:30 より)

探査子・目標一致の排除に向かって

——問い返し wh 疑問文の派生——

関西外国語大学助教 大 宗 純

Chomsky (2015)の極小主義モデルでは、統辞構造 (syntactic structure) を組み上げる併合 (Merge) は素性等の要因によって駆動されるのではなく、自由に適用 (free Merge) される。また、併合によって作られた統辞対象物のラベル (範疇) は最小検索 (Minimal Search) によるラベル付け (labeling/Labeling Algorithm) によって行われると仮定されている。このラベル付け同様に、最小検索は一致 (agreement) を所謂指定部・主要部の関係で行う (Epstein et al. 2017)。つまり、この派生モデルでは、探査子・目標一致 (Probe-Goal Agree) は排除されている。探査子・目標一致を排除し、ラベル付けで素性共有 (一致) を行う派生モデルは wh 句が元位置に残留した場合の統辞構造の派生に疑問を投げかける。本発表では、このモデルの下、探査子・目標一致を利用することなく英語の問い返し wh 疑問文 (echo wh-question) のような wh(-in-situ)疑問文に対して新たな構造を提案し、その帰結を探る。

第4発表 (14:20 より)

文末に生起する副詞的 to 不定詞の解釈について

近畿大学教授 吉田幸治

学校文法では、副詞的用法の to 不定詞には(1) 目的、(2) 結果、(3) 原因、(4) 理由などの解釈があるものと分類されてきた。副詞的な要素の解釈を区別する場合、節の階層構造 (hierarchical structure) における位置の違いによって説明するものが多いが、付加詞 (adjunct) の多用な解釈を明確に区別する構造的な位置 (position) または機能範疇 (functional category) が確立されているわけではないし、多くの場合には便宜的に新たな枝分かれ節点を設けることによって解釈の差を示そうとしているに過ぎない。本発表では、文末に生起する副詞的用法の to 不定詞の解釈メカニズムについて、動詞の意味と文脈を中心に考察を行い、次の2点を示す。(i)文末の副詞的 to 不定詞句は本質的には単義である。(ii)多用な解釈は動詞の中心義 (core meaning) と to 不定詞の意味によって合成的に導出される。解釈の導出には語用論的な推論も重要な働きをしているが、この点についても若干の考察を行う。

シンポジウム要旨

英米文学部門

パンデミックの時代——共同体、統治、終末のヴィジョン

司会・講師	関西学院大学教授	西 山 けい子
講師	筑波大学教授	佐 野 隆 弥
講師	龍谷大学教授	福 本 宰 之
講師	関西学院大学教授	高 村 峰 生

シンポジウムのねらい

ペスト、天然痘、黄熱病、コレラ、スペイン風邪、エイズ……。疫病は、戦争と同様、あるいは戦争以上に、人間の歴史に区切りを入れるものと言われる。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が世界的流行をみる2020年、わたしたちは改めてそのことに気づかされることとなった。世界は「以前」と「以後」で様相を一変させる。社会の基盤が揺らぎ、人間同士の関係や国と国との関係が途絶え、生活様式や喪の様式にも変化が訪れるとき、わたしたちは、いまの時代の状況を映す鏡として、あるいは未来の予言として、過去の疫病禍と疫病の文学にふたたび目を向けずにはいられない。本シンポジウムでは、エリザベス朝から現代におよぶ英米文学の長い系譜のなかで注目すべき作品をとりあげ、人間が集会的記憶として語り継ぐ、疫病の表象を検討する。共同体の統治管理の問題、危機に瀕しての人々の行動、死への向き合い方、疫病がもたらす絶滅のヴィジョンなどに注目し、疫病が（実相として／比喻として／寓意として）どのように描かれてきたのかを再考したい。

感染症と初期近代演劇

筑波大学教授 佐 野 隆 弥

ペストを中心とした感染症の常襲地帯であった初期近代のロンドンにおいて、疫病に関する記述は、例えば Thomas Lodge の *A Treatise of the Plague* (1603) などの医学的文書や、Thomas Dekker の *The Wonderful Year 1603* (1603) のような散文パンフレット、その他行政当局による記録や説教などを除けば、演劇作品のプロットや登場人物の中に、その直接的表象を確認することはきわめて難しい。バクテリアやウイルスなどの病原体を文字通り見ることができなかつた時代状況のもと、感染という現象や疫病の拡散は、身体的徴候や罹患者のマーキング等のタイムラグを伴った情報に基づいてコミュニティにより管理がなされた訳だが、こうした環境下であって、興行収益の確保と「3密」回避の劇場閉鎖といういわばトレード・オフ的狭間に置かれた演劇が試みた表象や可視化はどのようなものであったのか。戯曲を中心に初期近代文学からサンプルを拾いながら、そこに機能するメカニズムを検証してみたい。

A Journal of the Plague Year における 2 つの拡散

龍谷大学教授 福本 宰之

言うまでもなく、*A Journal of the Plague Year* とは 1665 年にペストがロンドンに拡散した際の記録である。デフォーはなぜ半世紀以上経った 1722 年にこの作品を世に問うたのであろうか。実は 1720 年に隣国フランスのマルセイユで再びペストが流行しており、一説によると人口の半分が亡くなるという大惨事に至った。つまり、ロンドン市民にすれば、当時は 1665 年の悪夢の再来が現実味を帯びてきた時期であり、これがデフォーをして筆を執らせた要因である—というのが目下の定説であり、この点は同じ 1722 年に彼が直近のフランスでのペスト禍を受けて *Due Preparations for the Plague* という冊子を出していることから首肯できる。その一方で、*A Journal of the Plague Year* には謎めいた語り手 H.F. の存在や、インチキ予言者、占い師の跳梁跋扈など、もう一つの拡散、つまり情報の拡散に対する警告も込められているように思われる。本発表ではこの観点から、*A Journal of the Plague Year* に込められた狙いについて考えてみたい。

“The Masque of the Red Death”とその変奏

関西学院大学教授 西山 けい子

19 世紀を通じてコレラは三度の流行をみるが、ポーはコレラの脅威によって死が身近に剥き出しになった同時代の恐怖を映し出すように、いくつもの作品において疫病のモチーフを用いた。傑作のひとつである“*The Masque of the Red Death*” (1842) では、中世の黒死病（ペスト）を彷彿させる「赤死病」が、厳重に閉ざされた城郭のなかにかいつの間にか侵入し、仮面舞踏会に興じるすべての人を死滅させる。治療法のない疫病に「隔離」という方策で対抗し、特権をもつ者たちがつかの間の享楽に身を委ねる姿は、カミュの『ペスト』やベルイマンの『第七の封印』などにもその反響がみられる。また、近年のエボラ出血熱や現下のコロナ禍においても、この寓話はしばしば引き合いに出されている。今発表では、疫病に関してポーが浮かび上がらせる普遍の相および予言的な相とともに、時代に即して読み換えられていく側面にも着目して考察したい。

パンデミックをめぐる記憶と忘却

—Katherine Anne Porter “*Pale Horse, Pale Rider*”(1939)と Thomas Mullen *The Last Town on Earth*(2006) におけるスペイン風邪表象

関西学院大学教授 高村 峰生

1918 年のスペイン風邪の流行は、2020 年のコロナウイルスの流行を契機として、語られることの増えた歴史的出来事である。数字には諸説あるものの、当時の世界人口 18 億人の 3 分の 1 の 6 億人が罹患し、一度期の流感としては 5000 万人が亡くなったとされるが、これまで第一次世界大戦の陰に隠れて、その存在はそれほど語られることが多くなかった。本発表では、著者自身の罹患体験を織り込んだ Katherine Anne Porter の“*Pale Horse, Pale Rider*” (1939)と、スペイン風邪のために自ら閉鎖した共同体を歴史的に調査して描いた Thomas Mullen の *The Last Town on Earth* (2006)を比較しながら、パンデミック表象のあり方について議論を行いたい。偶然にも時宜を得た出版となった Elizabeth Outka の *Viral Modernism* (2019)も参照しつつ、意識の曖昧となるような病める身体を描いたこの二つのナラティブの検討を通じて、パンデミックをめぐる記憶と忘却の表象について特に焦点を当てて考察する予定である。

司会・講師	関西学院大学准教授	茨木 正志郎
講師	名城大学准教授	久米 祐介
講師	中京大学准教授	松元 洋介
講師	弘前大学講師	近藤 亮一

シンポジウムのねらい

近年、言語理論に基づく言語変化の研究はますます盛んになってきており、自然言語に生じる様々な現象がこれまでに扱われてきた。しかしながら、通時的に観察される言語現象に対して、言語理論は十分に説明を与えられているのか疑問が残る。例えば、当該分野の先駆的研究である Roberts and Roussou (2003)では、言語変化とはパラメータ変化であると述べている。しかしながら、このようなモデルを仮定すると、あるパラメータに属する全ての語に急激な変化をもたらすことになるが、実際の言語変化は漸次的なもので同じパラメータに属する語によって変化の時期が異なるという問題が生じる。また、言語変化の起こる要因やメカニズムにまで踏み込んで説明されていないことも少なくない。本シンポジウムでは、各講師の専門分野から、言語理論を用いて言語変化に説明を与える可能性を示し、さらに、言語変化の要因・メカニズムについても明らかにしたい。具体的には、定冠詞の出現・発達、疑似受動文の発達、自由関係節の歴史的变化、that節の歴史的变化について、形態・統語・意味の観点から議論する。

定冠詞の発達と形態変化について

関西学院大学准教授 茨木 正志郎

英語の定冠詞が古英語の指示詞 *se* から発達したことはよく知られているが、そのプロセスや要因、構造分析についてはこれまで十分に議論されてきたとは言えない。本発表では、指示詞・定冠詞の形態変化に着目し、文法化の観点から説明を試み、さらに文法化が起こった要因について議論する。まず、史的コーパスを用いて、古英語から初期中英語における指示詞の形態の分布とその変化を調査し、得られた結果よりどの時期に定冠詞が確立したのか論ずる。また、現代以前の指示詞の統語位置は指定部であるとする先行研究が多いが (Gelderen (2004, 2011)、Watanabe (2009))、コーパス調査より指示詞と定冠詞が英語史においてほぼ共起しない事実を指摘し、英語における指示詞は古英語の時代から主要部要素であることを主張する。さらに、定冠詞の文法化は Hopper and Traugott (2003)での意味の漂白化によるものであり、意味の漂白化が起こった要因は、水平化に伴う特定の形態素の使用頻度の増加によるためであると主張する。

疑似受動文の意味と統語の通時的発達

名城大学准教授 久米 祐介

現代英語における疑似受動文には、受身文の主語は、動詞の表す行為や状態に関与していなければならないという関与 (Involvement) 制約 (久野 (1983)) と疑似受身文の主語は、その文の他の要素によって特徴づけられていなければならないという特徴付け (Characterization) 制約 (高見 (1997)) という2つの意味的制約が課せられることが先行研究によって指摘されている。しかし、疑似受動文におけるこの2つの意味的制約が統語構造とどのように結び付けられ、どのようにして生じるのかはほとんど議論されていない。疑似受動文は13世紀ごろに関係詞節内で動詞と前置詞の語順が固定され、語彙化したことから生じたとされている。本発表ではさらに与格形態素の消失と前置詞句への置き換えも疑似受動文派生の要因の1つとし、中英語、近代英語、現代英語のそれぞれの時代の疑似受動文事例を観察し、関与制約と特徴づけ制約の2つの意味的制約がどのような統語構造の変化から生じるようになったのか議論する。

英語史における自由関係節の歴史的变化について

中京大学准教授 松元 洋介

古英語の指示詞 *se* に代わり、中英語期に関係詞としての *wh* 語の用法が確立したことに伴い *wh* 語を用いた自由関係節が発達したことは多くの研究で観察されている。一方で中英語・近代英語期の自由関係節の分布を詳しく観察すると、現代英語では許されない *which* や *who(m)* により導かれる自由関係節や *to* 不定詞を用いた自由関係節が出現していたことがわかる。また関係詞 *wh* 語単体についても、中英語・近代英語期には定冠詞 *the* との共起や補文標識 *that* との共起といった現代英語では許されない用法が存在した。これまで上記のような自由関係節についての現象の出現・消失については分析がなされてこなかった。本発表はまず最新の生成文法の枠組みにおける現代英語の自由関係節・不定詞関係節の分析を概観し、なぜ現代英語では許されないタイプの自由関係節が存在したのかについて、関係詞としての *wh* 語の形態統語的位置付けの変化という観点から議論する。

英語史における節を導入する *that* の歴史的变化について

弘前大学講師 近藤 亮一

現代英語において、*that* には節を導入する機能があるということはよく知られている事実である。具体的には、*that* は動詞の補文を導入する補文標識として用いられるだけでなく、関係節を導入する関係詞としても用いられる。これらの *that* は指示詞から発達したものであるという仮定の下、多くの歴史言語学者により様々な分析が補文標識 *that* と関係詞 *that* の発達に対して提案されてきた。これらの環境に加えて、*that* はある時期まで自由関係節を導入することも可能であった。これまでの史的統語論の研究において、*that* が導入する自由関係節に対する理論的分析は、発表者が知る限り、提案されてこなかった。本発表では、英語史における *that* が導入する自由関係節の分布を明らかにし、その歴史的事実に関して、*that* の形態統語的位置づけの変化という観点から議論する。

大会準備委員

委員長： 団野 恵美子（大阪芸術大学・英文学）

副委員長： 鴨川 啓信（京都女子大学・英文学）

英文学部門委員：

木下 由紀子（神戸女子大学）

桐山 恵子（同志社大学）

米文学部門委員：

大川 淳（京都ノートルダム女子大学）

森本 道孝（大阪大学）

英語学部門委員：

寺田 寛（大阪教育大学）

平井 大輔（近畿大学）

開催校委員：

藤澤 博康（近畿大学）

（五十音順、敬称略）